様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７５４

研究課題名（和文）グローバリゼーションと植民地主義の観点からの主権と空間の歴史的分析

研究課題名（英文）The historical analysis of sovereignty and space from perspective of globalization and colonialism

研究代表者
高橋　秀寿（TAKAHASHI, Hidetoshi）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：７０３０９０９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　2013年度には5回、2014年度には2回の研究会を開催している。2015年度には国内外から8人の研究者を招いて5回にわたって研究会を開催した。そのなかで研究代表者の高橋秀寿は「「空間論的転回」以後の空間とナショナリズム――現代ドイツの極右主義を題材に――」を報告した。また年度末にはシンポジウム「沖縄に織り込まれた複数の空間性」を開催し、高橋秀寿はそこで司会と同時に、趣旨説明を行った。2015年度に田野・柳原編『教養のドイツ現代史』（ミネルヴァ書房）に「過去の克服」など五つのテーマで執筆を行い、同年度に単著『記憶と国民形成』（岩波書店）に原稿を提出し、現在編集中である。

研究成果の概要（英文）：Seminars ware hold for 5 times In fiscal year 2013 and twice in fiscal year 2014. In fiscal year 2015, eight domestic and abroad researcher were invited and seminars were hold for 5 times. In one of those seminar Hidetoshi Takahashi, the representative of this stuty project, reported “Space and Nationalism after ‘Spatial Turn’; the extreme right-wing force in present-day Germany”. And in the end of this fiscal year a symposium “the plural space inserted into Okinawa” was hold in Okinawa and presided by Hidetoshi Takahashi. There he performed outline explanation.Hidetoshi Takahashi wrote articles about five themes in a book publish by Minerva Shobo “German contemporary history for intellectual” and submitted a manuscript of a single work “Memory and Nation-Bilding” to Iwanami Shoten that is now editing.

研究分野：史学一般

キーワード：主権　空間　植民地主義　時間　ホロコースト　記憶　ドイツ

１．研究開始当初の背景
（１）これまで「空間」、「国民国家」、「グローバリゼーション」、「植民地主義」などをキーワードにして研究会を高橋秀寿と代表者として、「立命館国際言語文化研究所」のプロジェクト研究会（「グローバリゼーションと植民地主義の観点からの空間形成の歴史的分析」）のなかでとり行ってきたが、予算上の制約から不十分にしか発展することはできなかった。研究者による研究の基盤は確立しているため、十分な資金的基盤を獲得することで、これまでの研究成果をさらに発展させ、その公表を目指したことに、研究開始当時の背景がある。

（２）科学研究費を申請するにあたって、今後はこの研究会を発展させるために「主権」概念に着目することで、グローバリゼーションによって国民国家の空間が変容する現象から、現代社会の諸問題を解くカギをつかもうとした。現在において深刻な問題となっている領土・国境問題や民族紛争、国民国家からの地域の分離・独立の問題などは、国民国家の主権と空間との間の関係を問うことによってより生産的に分析できると思われたからであった。

２．研究の目的
（１）グローバリゼーションと空間の関係は重要な問題だが、「空間」の変容そのものを分析し、空間理論をグローバリゼーション研究に取り入れる研究は少なかった。グローバリゼーションによってこれまでの閉じられた伝統的空間はこじ開けられるといったように、空間には受動的な役割しか認められなかったからである。しかし領土問題からもすぐ理解されるように、グローバリゼーションが空間の価値評価とかかわっていることは明らかであり、グローバリゼーションと空間の関係を歴史的に分析することが急務であり、またそれがこの研究課題の目的として設定された。

（２）グローバリゼーションが空間の価値を高め、空間をめぐって問題を発生させたとすれば、その問題はまさに主権をめぐって展開されている。近代国家は主権国家として組織されていったが、グローバリゼーションは主権国家を変容させているのであり、主権がどのような変容をこうむっているのかを分析することは現代社会の変容を理解するうえで不可欠である。この研究課題はこの問題に取り組むことも目的とした。

（３）研究代表者の高橋秀寿は研究会を組織するだけではなく、自らもこの研究課題に取り組むことを目的とした。高橋秀寿の研究領域はドイツ現代史であり、ドイツもほかの国民国家と同様にグローバリゼーションの中で移民や難民の問題、さらにはそれに伴う極右やネオナチの問題に直面し、あるいはヨーロッパ連合という国民国家の枠組みをこえた組織の構築の課題に取り組んでいる。このような地域研究を通して、（１）と（２）にあげた「研究の目的」を追求することもこの研究課題の目的である。

３．研究の方法
（１）グローバリゼーション以前の主権と空間の歴史学的な分析アプローチ：グローバリゼーションが主権と空間にどのような変容をもたらしているのかを示すためには、それ以前における主権と空間の実態を歴史的に分析する必要がある。この研究課題は以下の問題を分析することでその解明の方法とした。
①近代国家としての国民国家は、国民を統治していく技法として空間をどのように形成していったのであろうか。
②国民国家が宗主国となって植民地の領土を支配していく旧来の帝国主義的な植民地主義において、どのように空間が形成されてきたのか。
③国民国家と植民地主義によって行なわれたこのような空間の形成は、Ｍ・フーコーが分析したように、中心から監視していく規律社会的なパノプティコン型の空間を目指していたといえるのであろうか。それだけではなく、その住民が情緒的にも自己同一化できるような美的・精神的空間も形成していったのではなかろうか。

（２）グローバリゼーション以後の主権と空間の分析アプローチ：国境‐領土問題や現在の主権と空間を巡る問題を分析していくために、この研究課題は以下の問題を分析することでその解明の方法とした。
①以前は主権国家が空間形成の主体としてあらわれたが、グローバリゼーション下ではその主権は国民国家の手を離れてグローバルなものとなり、グローバルな「主権」によって空間が形成されているのであろうか。それとも、国民国家はグローバリゼーションを推し進め、あるいは抑制する能動的な主体としての役割を担い、そのもとで空間は形成されているのであろうか。
②現在のナショナルあるいはローカルな主権は、「空間の国民化」とは質のことなる境界線を引き、新たな特質をもった美的な空間を形成しているのであろうか。

４．研究成果
（１）研究会活動
①２０１３年度：この年度には５回の研究会が行われた。第一回は法政大学の佐藤成基氏の報告「領土の喪失／故郷の喪失　戦後ドイツにおける被追放者たちの政治」、第２回は新潟大学の麓慎一氏の報告「帝政ロシアによる露領アメリカ経営と環太平洋における海洋秩序の変容について」、第３回は立命館大

学の番匠健一氏の報告「近代日本における内国植民論の位相――北海道、ドイツ、アメリカとの思想史連関から」、第４回は長志珠絵著『占領期・占領空間と戦争の記憶』の合評会を書評者に東京経済大学の戸邊秀明氏と立命館大学の福間良明氏を迎え、著者とともに合評した。第５回は同志社大学の水谷智氏を招いて「英領インドにおける植民地的遭遇と女性たち――法・道徳・境界」の報告と質疑応答が行われた。
②２０１４年度：この年度には二回の研究会が開催された。第１回は早稲田大学の鵜飼健史氏の報告「現代福祉国家における「主権と領域」―-主体と共生の共時的な構成」、第２回には早稲田大学の斉藤正樹氏が「世紀転換期ドイツにおけるナショナリズムと宗教－フェルキッシュ運動（Volkische Bewegung）を例として－」と題する報告と質疑応答を行った後に、植村和秀著『ナショナリズム入門』の合評会を著者が参加するなかを大澤真幸氏の書評によって行った。
③２０１５年度：この年度には５回の研究会と１回のシンポジウムを開催した。第１回の研究会は大韓民国の成均館大学校の玄大松氏の報告「韓国領土ナショナリズムの構造」第２回は研究代表者の高橋秀寿の報告「「空間論的転回」以降の空間とナショナリズム－現代ドイツの極右主義を題材に－」（詳しくは後述）と徳島大学の樋口直人氏の報告「日本の極右と国境問題－極右業界のマッピングと八重山地域紛争の分析－」を行った。第３回目はベルリン在住のジャーナリストのふくもとまさお氏の「戦後 70 年―戦争加害国ドイツの話をしよう」と題する講演会を行い、第４回は北海道大学の山崎幹根氏の報告「連合王国の統治システム変容－スコットランドの領域政治を中心に」、第５回は同志社大学の内藤正典氏の報告「内戦・難民・テロから考える領域国民国家体制の限界」と質疑応答が行われた。また年度末には沖縄大学にて、沖縄大学地域研究所の共催のもとにシンポジウム「沖縄に折り畳まれた複数の空間性　いま、なぜ、どのように沖縄現代史を書くか ―櫻澤誠『沖縄現代史米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』(中公新書 2015 年）をめぐって―」を開催した。立命館大学の桜澤誠氏のほかに、沖縄タイムス編集委員の謝花直美氏、神戸学院大学の松田ヒロ子氏、大阪大学の大野光明氏がパネラーを務め、研究代表者の高橋秀寿が司会と趣旨説明（詳しくは後述）を行い、多くの沖縄市民とも議論する機会を得ることになった。

（２）研究代表者の高橋秀寿の研究報告
①上述の研究会報告「「空間論的転回」以降の空間とナショナリズム－現代ドイツの極右主義を題材に－」では、「空間論的転回」とよばれる知の転換と現在の領土や国境の問題、ナショナリズムの現象、極右主義の台頭と密接に関係があるのではないかという問題提起をしたのちに、現在のドイツの極右主義の問題を題材に現在の主権と空間の問題を考察した。まず、戦後の極右主義の歴史を概観したあと、グローバリゼーションとエコロジー意識の広がりの現象から８０年代以降の時間／空間の変容を説明し、それが新たな極右主義を生み出していったこと、それはナチズムに代表される外向きの「進化論的な人種主義」というよりも、内向きの「エコロジカルな人種主義」にもとづくものであることを明らかにした。その意味でドイツの極右主義は８０年代以降の空間の変容という地球規模の現象から生じたドイツおよびヨーロッパ的事象であることと結論づけた。
②上述のシンポジウムの趣旨説明では、空間をグローバルな空間、ナショナルな空間、リージョナルな空間の三つに区分した。80 年代以前においては、グローバルな空間はインターナショナルな空間であり、ナショナルな空間の関係の相対であり、リージョナルな空間はナショナルな空間の単なる下位部分であり、東京からの距離によってリージョナルなものが位置づけられ、沖縄はまさに「辺境」であった。しかしグローバルな空間の出現によってリージョナルな空間がグローバルな空間に対して位置づけられることが可能になり、沖縄は東京とも、上海とも、台北とも、香港とも当館飼う名関係を構築できる可能性が生じた。このことが、産業構造の変化とともに、沖縄がこれまでの「構造的差別」から脱却できる可能性を秘めているのではないか、という問題提起を行った。
③２０１４年１２月６日に開催された同志社大学文化史学会大会では、「ドイツ 1980 年代――時間／空間の展開」と題する報告を行い、１９８０年代における時間／空間の変容をとくにドイツのポップスや映画などのポピュラー・カルチャーの分析を通して明らかにした。すなわち、とくに「森の死」問題によってエコロジー問題が一部の世代や階層の独占物ではなく、全国民の問題として意識されていくにしたがって、過去・現在から未来と進む進歩の時間が破局のイメージで意識された。この時間が空間の破壊者として理解され、空間の評価が高まっていくなかで、反原発運動のようなエコロジー運動が広がりを見せていった。同時に、人種主義もナチズムの進化論的な時間と結びついたイデオロギーから、エコロジー的な空間のイメージにもとづいたものへと転換していくことになる。その意味で「８０年代」の時間／空間の転回がその後のドイツ社会の変容と現状をもたらしていると考えられる、という内容で報告した。

（３）研究代表者の高橋秀寿の論文公表
①毎日新聞に掲載された「国家が生んだ儀礼」論文では戦没者追悼が時代をこえた普遍的異なものではなく、近代的現象であることを指摘し、ドイツのホロコースト記念碑のよ

うにグローバリゼーションのなかでナショナルな死者を中心とする追悼のあり方も変化していることを明らかにした。
②田野大輔／柳原伸洋編『教養のドイツ現代史』（ミネルヴァ書房、2016 年６月）で研究代表者の高橋秀寿は五つの論考を公表した。そこではドイツ戦後史の過去、ナチズムとホロコーストの過去との取り組み、政党文化、移民問題と極右主義に関して論じた。この研究課題ともっともかかわっているのは第１４章２の「移民問題と極右勢力」であり、ここでは前述の研究会報告「「空間論的転回」以降の空間とナショナリズム－現代ドイツの極右主義を題材に－」で報告した内容を駆使することで、グローバリゼーションと空間の変容の問題が移民の流入に対する抗議としての極右主義を台頭させ、そこでは「エコロジカルな人種主義」が展開されていることを論じた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 高橋秀寿「国家が生んだ儀礼」毎日新聞　２０１３年１０月１８日号　P.10.査読なし．２０１３年

〔学会発表〕（計３件）
① 高橋秀寿「「空間論的転回」以降の空間とナショナリズム－現代ドイツの極右主義を題材に－」立命館大学国際言語文化研究所プロジェクト研究「グローバリゼーションと植民地主義からの主権と空間の歴史的分析」2015 年度第 2 回研究会　２０１５年８月１日、立命館大学（京都府京都市）
② 高橋秀寿「ドイツ 1980 年代――時間／空間の展開」同志社大学文化史学会大会　２０１４年１２月６日、同志社大学（京都府京都市）
③ 高橋秀寿「W・ブラントの跪き――その神話化と歴史的位相」ドイツ現代史研究会４月例会　２０１４年４月２６日（キャンパスプラザ京都、京都府京都市）

〔図書〕（計１件）
① 田野大輔／柳原伸洋編、高橋秀寿『教養のドイツ現代史』ミネルヴァ書房、2016 年、350（242‐245、308‐312、312‐315、317‐320、321‐324）

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋　秀寿　（TAKAHASHI Hidetoshi）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：７０３０９０９５